

刀剣の歴史と思想

第2回

酒井 利信

刀剣思想の案内図

思想という言葉は、英語でいえば「thought」「考える」の過去分詞である。つまり考えてきたことが思想と考えるとよい。日本人は古来、刀剣を単なる武器としてではなく特別なものとして考えてきた。このことが日本人の刀剣思想である。

刀剣自体には長い歴史があり、その刀剣について考えてきた思想にも歴史がある。本稿では、個々の具体的事例の紹介や考察を積み重ねながら話を進めていくが、その時々でこの話をしているのかわからなくなっても困る。最初に、刀剣の歴史を概観し、刀剣思想の案内図を示しておきたい。

中国大陸の刀剣思想

▼刀剣のルーツ

刀剣の歴史と思想においてまず重要なことは、刀剣自体が他の金属文明と同様に、中国大陸から伝来したものであるということである。

もう一つ重要なことは、刀剣とは総合名

称であり、刀と剣は違うということである。剣とは両サイドに刃がついたいわゆる両刃（諸刃）のものをいい、刀とはそれを縦に

剣一両刃（諸刃）
刀一片刃

割ったような形の片刃のものをいう。この区別は、既に日本に刀剣が伝来する前の古代中国においてなされていた。使われはじめたのは剣のほうが先である。

古代中国の春秋時代にあたる紀元前六世紀から前四世紀頃の呉越地方が、刀剣の歴史と思想の起点と考えてよい。当時の中国は、戦乱の絶えないまさしく弱肉強食の混沌とした時代であった。通常、馬にひかせた戦車による戦いが行われていたが、呉や越、その周辺の楚といった地域は森林や湖



刀剣の歴史と思想

第2回「刀剣思想の案内図」

剣 ↓ 刀

武器としての刀
祭器としての剣

沼、河川が多く戦車戦に不向きであり、このことから白兵戦が主に行われていた。その際、使われていたのは諸刃の剣である。必然的に優秀な剣が多く作られるようになる。『周礼』や『莊子』に呉越の剣を讃える記述があるなど、当時、呉越の剣といえ

であるが、その後、武器としての主流を片刃の刀に譲ることになる。漢の時代を境に、突くことを主とした剣から、斬る技術に適した刀への移行がなされたといわれている。

ての剣という、大雑把な棲み分けがこの時点でなされていたと考えてよいだろう。言うまでもないが、より神聖視されたのは剣である。

ば有名であった。武器としての実用性が非常に優れていたことから、剣は神聖視されるようになり、**干将莫耶**や**太阿**（泰阿）に代表されるような宝剣についての伝説が生み出された。これが刀剣思想のルーツである。

戦場での役割を終えた剣は、無用のものとして歴史から姿を消したのかというところではなく、儀仗として使われたり、あるいはその神聖性ゆえに**道教**などの宗教儀礼の中に祭器として取り込まれていく。**道教**とは中国三大宗教の一つであり、仏教の釈迦や儒教の孔子といったようなカリスマ的人物の教義を広めた信仰ではなく、民間の中から土俗的に生まれた民族宗教である。

こういった観念は、道教の影響をうけつつ朝鮮半島においては**花郎**の思想にも関わり、さらに金属文明の伝播にもなつて日本列島へと伝えられることになる。

古代の刀剣

これらは全て刀ではなく剣についての伝説であり、**越絶書**や**呉越春秋**などといった漢籍にうかがうことができる。春秋時代、呉越地方で盛んに使われた剣

いは道教などの信仰宗教における祭器として

中国から日本に刀剣が伝わったのは、弥生時代初期にあたる紀元前三世紀末のことである。単に物質として武器が伝わってきたというのではなく、その思想をも伴ったの伝播であるということに特に注意すべ



弥生時代中期の銅剣・国宝（写真提供：島根県立古代出雲歴史博物館）

日本

弥生時代初期
紀元前三世紀末

*古代朝鮮の新羅における、愛国的な貴族子弟により組織された集団。平時から呪術宗教的な修養につとめ、戦時には戦士として活躍した。



きである。

金属器の伝来以降、日本では何百年もの間、金石併用時代がつづいたという。つまり金属器を道具としてなかなか使いこなせない時期が長くあったということである。弥生時代も中期になると、日本においては国産の刀剣を作りはじめるが、これらはどうも多くが祭器として作られていたと考え、間違いないようである。当時、中国大陸文化圏と日本列島では、文明に格段の差があった。大挙して押しよせてきたキラキラと輝く金属文明の代表格であった刀剣は、すぐに日常的な道具とはならず、むしろ人々はそのに非日常的な神性を感じて神々との交信の具としてこれを崇めた。

古代日本において神聖視され祭器として扱われていたものほとんどは、中国同様、刀ではなく剣である。

多くの古代社会がそうであったように呪術・宗教的観念が支配的であった古代日本において、剣は呪具として重用されていた。後に神道といわれる民間信仰にかかわる事柄であるが、ここには多分に中国道教からの流れが潜在する。道教の日本神道への影

道教 ↓ 神道

福永光司

響については、福永光司氏の研究に詳しい

が、この思想伝播の流れと、日本国内における金属文明に対するカルチャーショック、あるいは古代日本に顕著なアニミズムなどが相まって、日本人は剣を神聖視し、さらに剣を神々との関係において語る神話を生み出した。『古事記』や『日本書紀』に登場する、草薙剣や劔霊剣といった古代霊剣にまつわる神話がそれである。草薙剣や劔霊剣は、日本のもっともベシックな信仰宗教である神道にかかわって、熱田神宮と石上神宮のご神体として祀られるようになる。

古代日本において、武器としての刀が十分に使いこなされたという形跡は見当たらないが、剣は既に信仰宗教の世界で重要な位置を占めていた。

▼中世の刀剣

中世において特筆すべきは、日本刀の登場である。

祭器としての剣は、中世になっても変わらず神話的背景を基盤に信仰宗教の領域に

日本刀の登場



平安時代中期の毛抜形太刀・重文（神宮徴古館蔵）

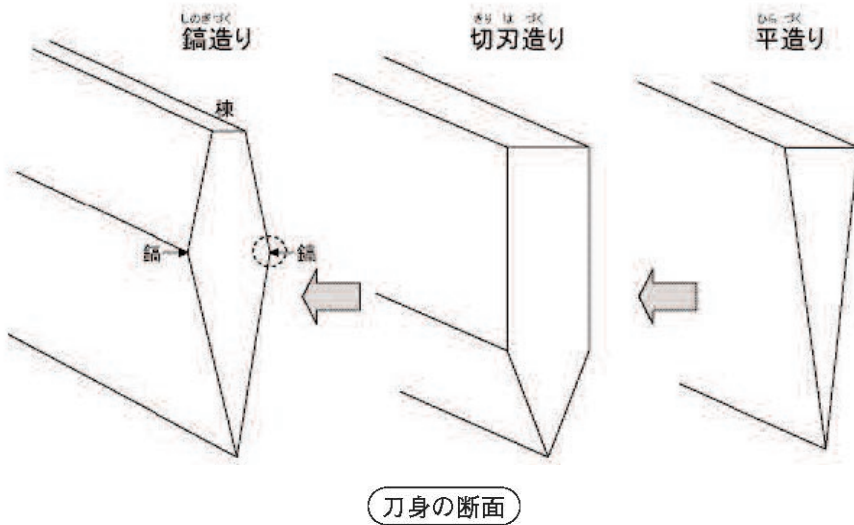


刀剣の歴史と思想

第2回「刀剣思想の案内図」

において重要な役割を果たすが、他方武器としての刀は、この時代、中国伝来のものから日本独自の形態をもついわゆる日本刀へと大きな変革をとげる。

日本刀には二つの特徴がある。



一つは、刀身に反りがあるということである。日本刀以前の刀は、刀身が真っすぐな直刀であった。直刀の場合、斬った時に衝撃を直に受けるため折れる可能性が高い。刀身に反りをつけて、刃の方向からの力を逃がすことによって、折れにくく、かつ斬れやすとした工夫である。これを直刀にたいして湾刀という。

直刀から湾刀への変遷については諸説あるが、この移行期に毛抜形太刀があったことは間違いないだろう。騎馬戦を得意とした東北の蝦夷が使用したといわれる蔵手刀が、湾刀形成のきっかけとなったという説もあるが定かでない。

日本刀のもう一つの特徴は、鑄造りである。刀身の断面を考えるとわかりやすいのであるが、およそ菱形のような形をしている。刃と棟の間が両側に高く張り出したような形になっており、この部分を鑄という。

そもそも中国から伝わった直刀は、平造りといい、断面は三角形である。その後、刀身の両側面が平行で急激に刃が切り込むような形の、断面が五角形をした切刃造り

が登場する。有名な聖徳太子の丙子椒林剣などは、この切刃造りである。折れや曲がりを防止するために厚みを確保したものと思われるが、この様式自体、唐大刀や唐様大刀という言葉があるように、中国大陸で工夫されたものが日本に伝えられたと考えられる。これを日本において独自に、鑄の部分で刀身の厚みを確保しながら、刃を鋭角にし、棟の幅も狭めることによって刀全体の鉄量を減らし、軽量化した工夫が鑄造りである。

もちろんこういった形の刀身が可能になったのは、*折り返し鍛錬*や造り込みの技術が、格段に進歩したためであろう。切刃造りの直刀から鑄造りの湾刀へ移行し、日本刀が完成したのは、平安時代中期ごろとされている。

この時期の日本刀を太刀といい、日本刀以前の直刀を大刀と書いて区別する。いずれも読み方は「たち」である。

この時代の刀剣思想をうかがうことのできる文献としては、(信仰宗教にかかわる祭器としての剣については、神道や仏教、特に修験道などの宗教書ということになる

*折り返し鍛錬：真っ赤に熱した玉鋼を二つに折っては金槌で鍛錬する作業を繰り返す。13回折り返すと8192層もの層が出来る。
造り込み：日本刀の刀身は、表面になる硬い皮鉄に柔らかい心鉄をはさみ込んで造られる。表面は固くて斬れやすく、中は柔らかくて折れにくい。





日本武道館護刀・宮入昭平作

が、日本刀をも含めてトータルで考えた場合、『平家物語』や『太平記』といった軍記物語などを対象とするのが妥当であろう。

中世日本は、絶え間なく戦乱のつづく乱世であり、日本史の中で武が最も実用性をもっていた時代である。しかし、その中の日本刀の役割はというと、どうも二次的であったといわざるを得ない。当時の武士は、さまざまな武技を身につけ、それを総合的に駆使して戦っていたが、その中でも弓が主流をなしていた。武士のことを、弓矢執る身といったぐらいである。優れた弓の技術、特に馬に乗っての騎射の技術は、武門の誉れであった。源平合戦最中の那須与一の伝説⑤などは有名である。しかし、日本刀が主役となる武勇伝はあまり聞かない。中世の合戦における日本刀の役割とは

いうと、主に自らの手柄を証明するために、討ち取った敵の首を斬ることであったという説さえある。いずれにしても、戦場では裏方であったようである。

あまり急いで結論めいたことを述べるつもりはないが、このこともあってか、反りと鑄をもつにいたった日本刀が、武器としてその機能をここまで飛躍的に進歩させたにもかかわらず、軍記物語などではこれに對する思想はあまり前面に出てこない。むしろ武家社会にありながら、草薙剣を含む三種の神器が大きな存在感を示している。

▼近世の刀剣

近世において日本刀そのものに着目した場合、特筆すべきは、太刀から打刀への移行である（いずれも大きくくりとしては日本刀である）。

太刀と打刀は何が違うかというと、まずその携行の仕方が違う。太刀は刃を下にして紐で腰に吊るすようにして佩くが、打刀は刃を上にして腰の帯にさす⑥。打刀は、抜き打ちに斬ることができるようにこうい



刀剣の歴史と思想 第2回「刀剣思想の案内図」

った携帯の仕方をした。(これは本来、雑兵など身分の低い者が帯用するもので、寸法も短いものであったが、室町時代になると武将や武人が太刀の添指そえさしとして使うようになり、太刀と同様の寸法となった。こういった移行期はあるものの、江戸時代にはいると、武士は大小の打刀を帯刀するようになった。現在では、長さが六十センチ以上のものを打刀あるいは刀といい、六十センチ未満のものを脇差といっている。

また思想上重要なことは、中世において副次的な存在であった日本刀が、近世にいたって武の中で主役を演じるようになったということである。

江戸時代は、本来戦闘員であった武士が為政者として世を治め、基本的に平和な世の中にあつて戦いの技術であった武芸を修練するという非常に特殊な時代である。それ故に武芸が文化として成熟したのであるが、その中で日本刀を操作する剣術が武芸全体を主導した。

(中世裏方にまわっていた剣術が、なぜこの時代に中心的役割を果たすようになったのかということについては、本編のなかで追って明らかにしていこうと思うが、一つには日本刀を帯刀することが武士階級の特権となり、これが武芸を修練することを嗜みとして求められた武士を象徴するものと

なったことも無関係ではないだろう。

剣術は、中条長秀(？―一三八四)の中条流、飯篠長威いひださちようい斎(一三八七―一四八八)の天真正伝香取神道流、愛洲移香あいすいこう斎(一四五二―一五三八)の陰流の三大源流といわれるものから派生して、三大系統を形成しつつ、江戸時代には途中新流を多く生み出しながら六百以上もの流派が存在するにいたったといわれている。近世における刀剣の思想は、新しく、これら剣術流派を中心に展開していった。各々の流派が残した剣術伝書から、これらの思想はうかがうことができる。(当然のことながら武器としての日本刀(打刀)の技術にかかわる思想で



刀剣の歴史と思想

第2回「刀剣思想の案内図」

近現代の刀剣

あるが、実はそれそのものとして独立しておらず、それまでの経緯を踏まえながら祭器としての剣の思想などのかかわりの中で、この思想が成り立っているところに特徴がある。

この辺りについては全編を通して明らかにしていく予定であるが、この時代、重層的な思想体系の完成をみたといつてよい。

明治維新以後の近現代において、特に注意すべき点は、身分制度が廃止され武士階級が消滅したということである。明治九年（一八七六）の廃刀令により帯刀すら許されなくなり、江戸時代の価値観は一変する。近世までの刀剣思想の体系は、信仰宗教にかかわる問題や社会制度にかかわることなど、剣術よりも普遍化される事柄もあったが、それらを含んで、総じて、武士階級というごく限られた人たちにより集大成された部分のウエイトが大きかったはずである。しかし、武士階級がなくなった時代からこそ、これを日本人全体の問題とすること

ができるともいえる。

近い時代のことは生々しくて言及しにくい。しかし、刀剣の思想を、日本人全体のアイデンティティーの問題として展開する可能性を秘めた時代であると考えたい。

〈註〉

（１）花郎とは、古代朝鮮の新羅における、愛国的な貴族子弟により組織された集団である。平時から呪術宗教的な修養につとめ、戦時には戦士として活躍したという。三国統一に多大な貢献をした新羅の大將軍である金庾信も、花郎の一員であった。

（２）福永光司『道教と日本文化』人文書院、一九八七

福永光司『道教と古代日本』人文書院、一九八七

福永光司『道教思想史研究』岩波書店、一九八九

（３）日本刀の鍛造は、真つ赤に熱した玉鋼を二つに折っては金槌で鍛錬する作業を繰り返す。これを折り返し鍛錬という。刀匠により折り返す回数は異なるが、例

えば十三回折り返し鍛錬をしたとすると、八千百九十二層もの層ができることになり、これが日本刀の強さの秘訣となっている。

（４）日本刀の刀身は、表面になる硬い皮鉄に軟らかい心鉄をはさみこんで造られる。この製法を造り込みという。このことが表面は硬くて斬れやすく、中は軟らかくて折れにくいという日本刀の特徴となっている。

（５）屋島の合戦の最中、那須与一が、海上に浮かぶ平家側の小舟からかざされた扇を、遠方の馬上から見事に射抜いたという伝説。

（６）日本刀は、通常茎の佩き表（身につけたとき外側になる面）に作者銘を彫りこむ。刃を下にして身につける太刀と、刃を上にして帯にさす打刀とでは佩き表が逆になるため、反対の面に銘が切られている。

また現在、博物館などでは、太刀は刃を下にして展示し、打刀は刃を上にして展示している。陳列方法からも区別することができる。

